

第9回「たちばな教育サロン」実施報告

2019年10月23日（水）12時半～14時にかけて、第9回「たちばな教育サロン」をF301教室にて開催いたしました。今回は「研究教育」をテーマとして、2名の教員から実践報告をしていただきました。教職員の参加者は24名でした。異なる学科の研究教育の在り方に関心を寄せつつ、共通点も見いだせる興味深い時間になりました。

本稿では、サロンに参加できなかった先生のために、各先生の演習教育の工夫ポイントをダイジェストでお伝えいたします。

報告1.

「学生が研究を“学ぶ”ということ」

看護学科 教授 奈良間美保 先生

奈良間先生からは、看護学科の3回生前期必修科目「看護研究演習Ⅰ」において、研究に関する基礎をいかに学生に学ばせているかを教えていただきました。

人文・社会科学領域においては、研究教育は個別のゼミ、指導教員が最初から最後まで行うこととなります。しかし看護学科では、このゼミに分かれて研究について学ぶ前に、全員に対する演習教育として、「研究」を教えている点が特徴的です。

しかし、「研究」を教えるにしても、研究というもののイロハもわからない初学者に全てを教えることは到底難しいものです。そこで、「看護研究演習Ⅰ」では、“**看護研究に関心を持ちながら、基本的知識を学ぶ**”ことに焦点を絞り、様々な工夫をしながら教えています。

<工夫1：看護研究の位置づけを可視化する>

看護を学ぶということは、看護学という中心の柱の左右に「臨地実習」と「看護研究」という支柱を立てるということ。そしてその2つの支柱を支えるように様々な講義科目や演習科目が配置されているというものであるということを、図解で示

しています。つまり、看護研究を学ぶということは看護学を身につける上でなくてはならないものであり、かつ他の科目とも密接に関わっているということを学生に理解してもらいます。

<工夫2：学生自身の主体性を尊重する>

早い段階から「実習を通して疑問に思ったことは？解決したいと思ったことは？」という問いを学生に投げかけ、書き出させています。ただ、何でもよいとしてしまうと、あまりに広がりすぎてしまうので、「人の健康、看護の発展に意味があること」という条件を設定します。自分の意思で問いを考えられることは学生にとっても魅力的なようで、授業後の感想でも「すべては疑問から生まれることが意外だなと感じた」「考えていくことが好きなので、これからの授業が楽しみ」など、前向きな感想が多く出てきます。もちろん「難しいので、わかったようなわからないような感じ」というコメントもあります。

この問いづくりの後に、資料探しと要約をさせるのですが、ここで反省点がありました。学生の力を信頼しきれず、教員が資料（基本的な看護論文）を指定し要約させてしまったのです。ここで半分程度の学生の意欲がぐっと下がってしまいました。学生が自ら立てた問いに基づき、そのまま資料探しや要約をさせるべきだったかもしれません。具体的な手順を示せば、学生もある程度研究ができるので、もう少し学生を信頼し、彼・彼女たちの主体性をさらに尊重していくような授業展開も試みたいと奈良間先生は語ります。

<工夫3：「キャリア開発演習」で基礎力づくり>

“看護学科の学生は、具体的な手順を示せばある程度できる”ことには、理由があります。看護学科の学生は、1年前期からキャリア開発演習という必修科目で、スタディスキルやアカデミックスキルを学んでいるからです。ここで情報検索の仕

方や、レポートの書き方などを丁寧に学んでいるため、何をすべきかが指示されれば、ある程度の基本的なことはできるのです。しかし、キャリア開発演習でも、研究のための情報検索を教えられているわけではありません。そのため、「(キャリア開発演習の時は) 目的を持って調べていたわけではなかったの、自分の疑問の解決の為に文献検討をすることが出来そうだ」といったコメントが学生から挙げられるなど、キャリア開発演習から看護研究演習へと、無理なくレベルアップさせられていることがわかります。

実際の卒論執筆期間が2カ月しかないという大変厳しいスケジュールの中でも、卒業論文を全員が書けるようにするためのカリキュラム上の工夫です。他学科も参考になるのではないのでしょうか。

報告2.

「卒業制作から卒業研究へ」

都市環境デザイン学科 教授 小暮 先生

小暮先生は、京都橘大学に着任してから今年で19年目を、そして20年目となる来年度には定年を迎えられます。出身校である東京大学法学部では卒業研究がなく、小暮先生ご自身が学生に卒業研究をさせるということについてイメージを持っていないまま、試行錯誤をし続けてこられました。

もともと小暮先生は自治省のご出身で、地方公共団体が自分たちの手で文化をつくっていくということを推進してきました。その背景もあり、橘女子大学着任後も、学生と共に文化的なイベントを行い続けてきました。その一環が、2001年度から5年間とりくまれたプロジェクト「関西女性と希望のアーティストファイル」です。地域と、アーティストと学生が結びついて、様々な文化企画を作っていました。このような企画や芸術活動への関わりを、どのように卒業研究へと結びつけるかに小暮先生は苦心されてきました。その中での工夫を3つにまとめます。

<工夫1：正課外活動を積極的に活用する>

先述の通り、研究のベースは“活動”になります。学生が体験してきたこと、これから体験していくことをいかに研究へと発展させられるかとい

う発想で考えます。中には、大学の企画とは関係なく、学外で文化活動や芸術活動にいそしんでいる学生もいます。そういった学生は、そういった活動を大学内に持ち込んでもらい、研究にしていこうということも推奨します。

もちろんそういった学外での活動はほとんどしていないという学生も大勢います。彼らに対しては、1, 2年生の内にいろいろなことを体験させてあげられるようにしています。

<工夫2：記録を積極的にとらせる>

ただ活動しただけでは研究になりません。活動を客観的に捉え直すことが重要になります。そのためには記録が不可欠です。制作記録を残す、写真を沢山撮っておく、アンケートとるなど、文章から映像から様々な記録をとにかくとっておくことを推奨します。

<工夫3：観客としての視点を大切に>

活動を客観視するためには、自分自身が活動の観客になることも重要です。他の学生の活動を積極的に観察し、何を感じ、何を考えたについてアウトプットさせ、それを活動の主体であった学生にフィードバックする。これは“観客としての積極性を持たせる”とも言えます。そこから芸術を社会化していくという挑戦でもあります。

体験したことを概念化する言葉にすることは大変に難しいことです。先行研究を参照してまとめるということも必要になります。一方、概念化にこだわりすぎると、自由さを阻害してしまい、洞察がうまれないといった弊害も起きがちです。

学部生だからこそ、概念化というところまでいかないまでも「ことば化」というところまで持っていければ十分ではないだろうか、という議論を経て、報告を終えていただきました。

奈良間先生、小暮先生、ありがとうございました。今後も同僚性を生かした教育開発支援の場として教育サロンを続けてまいります。今後も、読者である皆様にも広くご参加、ご協力いただければ幸いです。